

語り継ぐ 戦争の記憶

8月15日、日本は終戦記念日を迎えます。時が経つにつれて、戦争の悲惨さや虚しさは、私たちの記憶から薄れていきます。このような中、戦争の惨禍を風化させないようにと、戦争の体験や平和の尊さを次世代に語り継ぐ人たちがいます。

戦争の体験手記の朗読劇や人権セミナーを開催し、平和な社会づくりを目指している「NPO法人ヒューマンライツネットはらんきょうの会」を紹介します。



「三輪車」提供 / 広島平和記念資料館
寄贈者 / 鎌谷信男

伝えたい事実

「つらい体験をあえて手記に残した人たちには、同じ思いをほかの誰にも味わってもらいたくないという気持ちがあったのだと思います。だから、私たちが演じるのではなく、その作者に代わって朗読する、伝えるというのを大切にしています」と話すのは、はらんきょうの会の加藤由美子会長（海老ヶ島）。柔らかい表情ながらも、平和を願う強い思いが伝わってきます。

広島・長崎の被爆体験手記と詩を語り継いでいる「はらんきょうの会」。はじめたきっかけは、『この子たちの夏』という広島・長崎の被爆体験手記を聞いたときに、原子雲の下でどういうことがあったのか、残った人たちがどういう生活や思いをしていたのかを知り、衝撃を受けたからだそうです。

「若い人たちに、まずはどういったことがあったのか事実を知ってほしい。知ったうえで、私たち一人ひとりの問題として捉えて、考えるきっかけになればと思います」と加藤さん。一人ができることは

小さなことかもしれないけれど、その積み重ねが、未来につながっていくのだと思います。

「朗読は、台本を読むだけでは伝わりません。それだけでは、うわべだけになってしまいます。だから、原爆写真集や本を何冊も読んで、当時の情景や作者の伝えたいことを想像してきます。準備ができていると、台本の行間にある作者の思いが読みとれます。それが読んでいるときの「間」になったりもします」と会員の中野智恵子さん（上野）は話してくれました。





言葉一つ一つに気持ちをのせて、語りかける。単なる情景ではなく、そこには感情が移り変わっているのだから。作者の目に映った風景を読みたい、思いを伝えたい。それが、私たちの使命なのかなと思った（はらんきょうの会会員一同）。

時代を越えた想い

今年で21回目の公演になる朗読劇『あの夏の日の記憶 ヒロシマナガサキそして』は、子どもを亡くした母親や父親の手記、親を亡くした子どもの手記、詩などが中心の内容です。今回は、被爆した当時だけではなく、生き延びた人のその後の人生も伝えます。さらに、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館から提供された、原爆を落とされたときの写真や中学生の遺品の写真などもスライド上映します。真などにもスライド上映します。迫力ある朗読に合わせた、照明や効果音などの演出で、より観る人の心に響く、臨場感あふれる公演になっています。

加藤さんは「悲しい部分もありますが、悲しかったねで終わるのではなく、この先こういう悲しい思いをしないためにはどうしたらいいのか、平和を考える1日になったらうれしいです」と話してくれました。

戦争をする、しないの選択ができるのは私たち人間です。会員のみなさんが魂を込めた朗読劇に耳を傾け、想像力を働かせると「二度と戦争はしない」と心が震えます。そんな活動を続けるはらんきょうの会は、今後平和を願う人たちの「希望の光」になるのではないのでしょうか。

朗読劇

あの夏の日の記憶 ヒロシマナガサキそして

入場無料

8月5日(日) 午後1時30分開演

明野公民館大ホール「イル・ブリランテ」

主催 NPO法人ヒューマンライツネット

はらんきょうの会

問い合わせ 加藤 ☎52-2590

「爆心地から廃墟を望む」(現：平和記念公園周辺) 提供 / 広島平和記念資料館 撮影 / 米軍

